

# 日本統治末期，台湾先住民の島内軍事動員

## —特設警備第514大隊の分析

At the end of WWII, Indigenous Peoples of Taiwan and Mobilization Related to  
--'Absence name lists' of unit 514

小野 純子

Junko ONO

### はじめに

本研究における問いは、1940年代、大戦末期から終戦に至るまでの日本植民地防衛体制の中に先住民族をどのように組み込もうとしたのか、ということである<sup>1)</sup>。大戦末期の台湾では、台湾先住民（高砂族）が台湾島内で集中的に動員された<sup>2)</sup>。本研究では、これら部隊に焦点をあて議論を進める。

台湾における高砂族の動員は、これまで軍事史の観点から、聞き取り調査をもとに様々な検討がなされてきた。高砂族の戦争動員に関しては、「高砂義勇隊」のものがよく知られ、多くの研究が行われている<sup>3)</sup>。

特に、島外、南洋地域における戦場動員が注目されていた。これは、「劣悪な環境下で日本軍のために自らを犠牲にした」という経験が重要視されてきたことによる。しかし、高砂族が動員されたのは、実際には「高砂義勇隊」だけではない。そして、南洋で活躍した高砂義勇隊の研究だけでは、一地域の事例に留まり、植民地の全体の防衛体制という枠組みでの高砂族の動員の実態解明には至らない。島内に残った高砂族は、終戦間際、戦争に関与していくことになる。

筆者の『留守名簿』調査の中で、大戦末期に高砂族が台湾島内で集中的に動員されている部隊「高砂特設警備部隊」が複数存在したことを確認した。「高砂特設警備部隊」に関しては、『第十方面軍関係戦史資料』（防衛省）に「高砂特設警備」と記載はあるものの、既往研究ではその存在自体明らかにされていなかった。その詳細は第1章で述べる。これまでの調査の中で1部隊（特設警備部隊第513大隊：以下、第513大隊）に関しては『留守名簿』の調査・分析を終えているが、本研究では1部隊ごとの詳細な調査・分析を行う。

1) 本論の用語に関しては、近藤正巳『総力戦と台湾』（刀水書房、1996年）、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸海軍年表 付兵語・用語の解説』（朝雲新聞社、1974年）、小野純子「日本統治末期、台湾の防衛体制と『留守名簿』—第40軍と嘉義を中心として」（博士論文）、（名古屋市立大学、2019）を参照されたい。

2) 小野純子「台湾原住民と動員：『特設警備部隊第513大隊台湾第13887部隊 留守名簿』に関して」、名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究、34巻、2020年、pp.103-113で特設警備部隊第513大隊に関して整理している。

3) 日本における高砂義勇隊の研究に関しては、菊池一隆「台湾原住民から見るアジア・太平洋戦争—高砂義勇隊の実態と歴史的位置—」（『現代中国研究』第33号、2013年、特集：日中戦争における東アジア）、菊池一隆『日本軍ゲリラ高砂義勇隊

台湾原住・民の太平洋戦争』（平凡社、2018年）が詳しい。

そこで本論では、特設警備第514大隊（以下、第514大隊）を取り上げて分析を行う。

『留守名簿』に関しては、名簿ごとに公開状況と保存状態が異なる。高砂特設警備部隊の『留守名簿』であると推察される名簿は5冊保管されているが、その中で、第514大隊の名簿は、保存状態が良い史料である。

大戦末期の台湾島内での軍事動員については、高砂族に限らず、漢民族においても同様に資料、研究が乏しい。台湾島内で動員された人々は軍属・軍夫とは異なり、「兵士」の身分であったにもかかわらず、既往の研究ではその存在自体も明らかにはされていない<sup>4)</sup>。

大戦末期、アメリカ軍が台湾を通り越し、硫黄島、沖縄そして本土決戦へと進めていく中、台湾では大本営にとっての「コマ」が多く動員され、彼らによって台湾の防衛体制は構築されていった。本研究は、その中で、高砂族の部隊に焦点をあて、既往の台湾人動員や高砂義勇隊の研究では収まらない植民地動員体制、防衛体制<sup>5)</sup>の解明を目指す。台湾島内における高砂族の特設警備部隊編成による

最終局面を検討する一助となる。

## 1. 太平洋戦争末期の台湾島内動員と先住民

大戦末期の台湾では、防衛力強化が図られ、特設警備部隊とよばれる臨時部隊<sup>6)</sup>が編成された。また1943年から1945年はじめにかけて、台湾島内では大規模部隊の新設や満州、沖縄からの転入などが行われた。終戦時の台湾防衛体制は、第10方面軍の管轄下、5つの師団と6つの旅団<sup>7)</sup>と各地で編成された特設警備部隊により総数16万人以上であった<sup>8)</sup>。

大戦末期に台湾島内で行われた軍事動員では、師団や旅団の転入・新設に伴う徴兵を中心とした召集と特設警備部隊の編成に伴う一斉召集が行われた。本研究では、後者である特設警備部隊に関して議論するが、特設警備部隊はその大部分が1945年に編成され、活動期間が短く実戦経験もないまま終戦を迎えたため、既往の研究では議論されることはなかった。しかし、台湾では、110個もの特設警備部隊が編成され、そこへの動員は台湾島内の人員が中心であった。彼らは、何らかの一定の単位を以って、部隊を編成していた。その中の一つが高砂族らによる「高砂特設警備部隊」である。1945年3月以降に編成された特設警備部隊53部隊のうち約20部隊が「学生」や「先住民」の地域ごとの一定の単位で

4) 戦前、漢人と先住民は異なる法律が適用されたが、本論が主題とする「特設警備部隊」の召集に関しては現在までにその召集日や役種などから大きな違いは見られない。第514大隊に関しては先住民とみられる人々の役種「現歩二」（現役歩兵二等兵）であり、本論では「兵士」の身分とした。特設警備部隊の「兵士」の身分に関して、特設警備部隊では、召集された人員は「現歩二」または「二国歩二」（第二国民兵役歩兵二等兵）であることが多く、陸密第5176号によれば、台湾人で第二国民兵役の身分の者は「現役兵」として徴兵されたようだ。本論で取り上げる「先住民」の召集方法は調査中であるが、少なくとも「漢人」は特設警備部隊の人員も「現役兵」と言えるだろう。先住民に関しては今後継続して調査を行う。「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12120520300、陸密綴昭和20年（防衛省防衛研究所）」。

5) 大戦末期、日本軍の中央が台湾防衛のため、師団や旅団の新設・転用などを実施し、軍を整えた。それは延いてはアメリカ軍の台湾上陸を予測した日本本土の防衛につながるものであった。植民地防衛体制は、日本を防衛するための植民地、台湾での防衛体制である。

6) 特設警備部隊とは、「戦時又は事変に際し或は必要に応じて特設する部隊又は目的に応じて臨時に編成する部隊」である。1943年6月（軍令陸甲第58号）、台湾に多数の特設警備大（中）隊の臨時編成が下令された。

7) 師団は20000～40000人、旅団は5000～10000人の大規模な部隊である。台湾には、沖縄より転入した第9師団、満州より転入した第12、第71師団、台湾で新設された第50、66師団が各地に配備され、加えて独立混成第76旅団をはじめ6個の旅団が各地の防衛を担った。

8) 小野純子「日本統治末期、第10方面軍の台湾防衛体制－特設警備部隊を中心に－」、『現代台湾研究』vol.50、2020年。

集められた人々により構成されている<sup>9)</sup>。 編成されていたことが分かる。以下、【図1】、  
 高砂族に関しては、『第十方面軍関係戦史資料』 【図2】を参照されたい。

【図1 第十方面軍関係戦史資料①】

二十一年三月主要事項

考	備	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	

0531

【図2 第十方面軍関係戦史資料②】

三月廿四日 平野區分ニ依リ左記部隊ヲ編成シ續成充結時又  
 各天團ニ配屬ス

左記

臨時獨立歩兵第百六大隊 第百四軍  
 西第一大隊 第百六師團  
 砂第二大隊 第百九師團  
 第百三大隊  
 第百四大隊 第百四軍  
 第百五大隊  
 第百六大隊 獨立混成歩兵旅團  
 臺灣軍教育隊 第百四軍

三月廿六日 臺灣方面作戰關シ陸海軍現地基本協定ヲ締結  
 シ臺灣方面於テ海軍陸戦支隊ノ陸上作戰關連  
 處ニテ各天團ニ命メ令ス

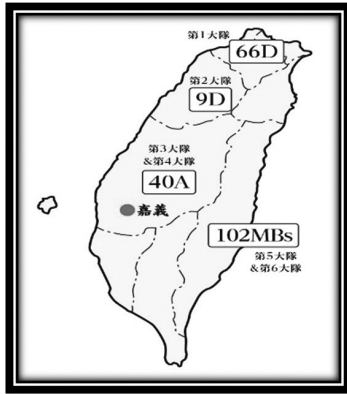
三月廿七日 情勢急變依リ沖繩本島ニ對シ獨立混成第百三聯  
 隊ヲ増遣シ中ニ第百六師團長ノ指揮下ニ入リ  
 宜蘭地區ノ防衛ヲ強化セシム

② 敵機動部隊沖繩周邊ヲ游スニ陸上機ノ窺ハ  
 情勢ニ鑑ミ臺灣米海岸地區ニ戰備用餘  
 地區ニ戰備ノ發令ス

(出典：『第10方面軍関係戦史資料』（防衛省防衛研究所）筆者撮影)

9) 小野純子「日本統治末期，第10方面軍の台湾防衛体制－特設警備部隊を中心に－」、『現代台湾研究』vol.50, 2020年, p38.

【図3 高砂特設警備部隊詳細<sup>10)</sup>】



大隊	師団	地区
第1大隊	第66師団	台北
第2大隊	第9師団	新竹
第3大隊 第4大隊	第40軍	嘉義
第5大隊 第6大隊	独立混成第102旅団	花蓮港

【図1】，【図2】では，「1945年3月25日，高砂特警1-6大隊」や「1945年3月23日，軍隊区分により，高砂特設警備部隊第1大隊から第6大隊が編成」という記載が確認できる。

【図3】は資料を基に筆者作成した表と地図である。第1大隊は，第66師団（台北），第2大隊は，第9師団（新竹），第3大隊と第4大隊は第40軍（中南部，嘉義），第5大隊と第6大隊は，独立混成第102旅団（花蓮港）であった。

筆者は，これまでの『留守名簿』調査の中で，大戦末期に高砂族が集中的に集められた部隊の名簿を発掘した。それが，上記の高砂特設警備部隊と推察される。『留守名簿』では，以下，【表1】で示すように特設警備第513，514，515，516，517大隊が該当すると考えられる。それは，『留守名簿』（【図4】）に記載された在留地住所や姓名などから推察

される。筆者は，これまでの『留守名簿』調査の中で，『第十方面軍関係戦史資料』に記載のある「高砂特設警備」部隊の名簿と推察される5冊（【図4】はその一部である）を発掘した。これらの名簿の分析から大戦末期に高砂族が集中的に集められた「特設警備部隊」が存在したことが判明した。では，次章より，発掘した部隊である特設警備第514大隊（以下，第514大隊）の『特設警備部隊第514大隊 台湾第13888部隊 留守名簿』を分析していく。

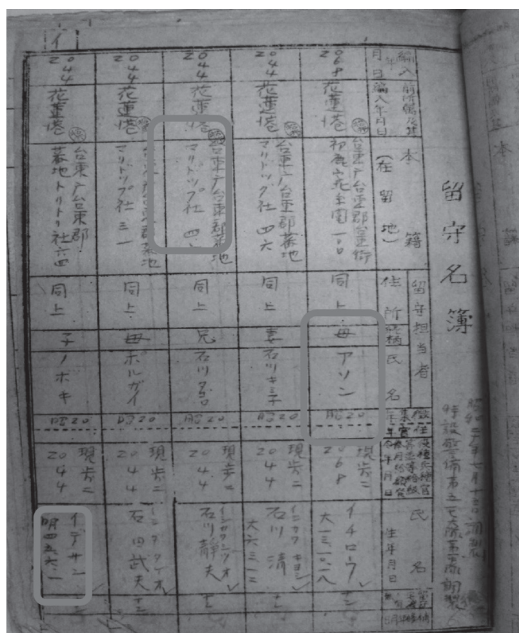
10) 地図上，Aは軍，Dは師団，MBsは独立混成旅団である。

【表1 高砂特設警備部隊整理表<sup>11)</sup>】

部隊名	編成地	編成日	人数	備考/管轄地域
第513大隊 台湾第13887部隊	新竹	S20.4.9	620名 <sup>12)</sup>	令甲63号 新竹周辺
第514大隊 台湾第13888部隊	台中	S20.4.9	600名 <sup>13)</sup>	令甲63号 台中周辺
第515大隊 台湾第13889部隊	高雄	S20.4.9		令甲63号 旗山郡で警備と高砂族(250名)の訓練に従事 <sup>14)</sup>
第516大隊 台湾第13890部隊		S20.4.9		令甲63号 花蓮港周辺
第517大隊 台湾第13891部隊	花蓮港	S20.4.9		令甲96号 台東周辺

(出典：注11をもとに筆者作成)

【図4 『特設警備第517大隊台湾第13891部隊 留守名簿』】



(出典：『特設警備第517大隊台湾第13891部隊 留守名簿』, 国立公文書館にて筆者撮影)

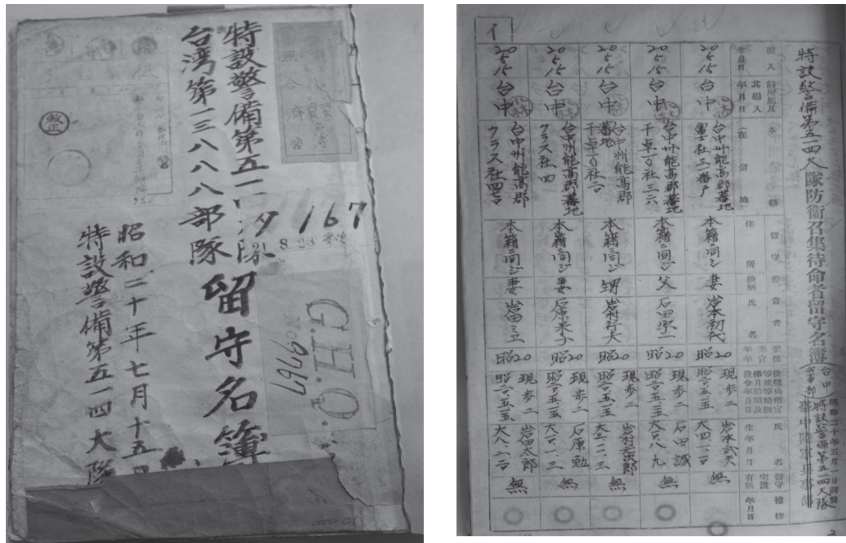
11) JACAR : Ref.C12120981200, C12120981300, C12120981400, C12122499300 (S41) C12122495200 (S38), C12122495300 (S38), 各部隊『留守名簿』より整理。

12) 小野純子「台湾原住民と動員：『特設警備部隊第513大隊台湾第13887部隊 留守名簿』に関して」, 『人間文化研究』, 名古屋市立大学, 2020年でその詳細な人数について論じている。

13) 詳細は次節で述べている。

14) Ref. C12122499300 「南方. 支那. 台湾方面陸上部隊略歴(航空. 船舶部隊を除く) 第2回追録」 18. 台湾方面部隊(2)に「高雄州旗山郡に在りて, 警備並びに高砂族(250名)の訓練に従事」と記載されている。

【図5】『特設警備部隊第514大隊 台湾第13888部隊 留守名簿』



（出典：『特設警備部隊第514大隊 台湾第13888部隊 留守名簿』，国立公文書館にて筆者撮影）

## 2. 『特設警備部隊第514大隊 台湾第13888部隊 留守名簿』分析

【図5】は、第514大隊の表紙と名簿である。筆者は、第514大隊は、第513大隊と同様に部隊が高砂族を中心に編成されたもの、つまり高砂特設警備部隊ではないかと推察した。陸軍一般史料によれば、第514大隊は1945年4月に軍令63号により編成され、台中周辺に配置された。その管理は、第10方面軍により行われていた。では、『留守名簿』を分析する。第514大隊の『留守名簿』は、その他多くの名簿と同様に1945年7月15日に調整された。『留守名簿』記載の編入日から部隊の編成は1945年4月20日であったことがわかる。【図6】の部隊略歴から編成完結日であったことがわかる。また、第514大隊に関しては、編入日は本籍が日本内地の者は1945年4月20日前後であり、台湾島内に本籍をおく者は全員、1945年5月15日と記載されている<sup>15)</sup>。そして終戦後、

1945年9月3日に復員完了、召集解除が完了している。そこに記載された人々の本籍により、第514大隊が「台中州」の部隊であることがわかる。さらに「台南州（嘉義）」の高砂族が一部含まれる。これは、第513大隊が、新竹周辺の高砂族のみで構成されていたこととは異なる、第514大隊の特徴であるといえる。以上のことから、第514大隊は、高砂特設警備部隊第3大隊もしくは第4大隊ではないかと考えられる<sup>16)</sup>。

または7月5日など、何回かの召集を経て部隊を編成していることが多かった。同じ高砂特設警備である第513大隊は全員が4月20日に召集された。

16) 学徒による特設警備部隊の編成においても、部隊番号の改編は度々行われていた。例えば1945年3月20日に編成した学徒特設警備第8大隊は、4月15日には、特設警備部隊第511大隊へと変更している。「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C12122495300, 南方 支那, 台湾方面陸上部隊略歴（航空 船舶部隊を除く）第2回追録（防衛省防衛研究所）」。

15) 筆者がこれまで調査してきた学徒の特設警備部隊では、1945年3月20日、4月2日、6月30日



第514大隊の全体数は、600名である。うち日本人は52名であり、その他548名（台中：500名、台南：48名）は高砂族であると考えられる。召集された人々の年齢は差が大きく、明治後半生まれから昭和前半生まれ（1907年～1930年）ら年齢にして15歳～40歳を過ぎた人々が集められた。しかし、第513大隊が年齢によりその役種を分けていたこととは異なり、第514大隊は日本人を除く全ての人々が「現歩二」（現役歩兵二等兵）として集められた<sup>17)</sup>。第514大隊では、年齢による召集、役種の基準が曖昧であったと推察される。

高砂族であると考えられる人々の具体的な本籍を確認した結果、台中州新高郡、台中州能高郡、台中州東勢郡、台南州嘉義郡にある蕃社の名前が続くものとなっていた。以下、【表2】、【表3】は『留守名簿』記載の蕃社を整理したものである。

新高郡はブヌン族とツウオ族、能高郡はタイヤル族とブヌン族、東勢郡はタイヤル族、嘉義郡はツウオ族の居住地であるため、第514大隊に集められた人々もブヌン族、ツウオ族とタイヤル族であると推定できる<sup>18)</sup>。

【表2 台中州】

台中兵事部	社名	人数
新高郡 ブヌン族、ツウオ族 193名	人倫社	22名
	緑ヶ岡	20名
	トンボ社	12名
	イシガン社	26名
	ワラビ社	20名
	和社	13名
	トンボン社	1名
	ナマカバン社	28名
	ロロナ社	3名
	タマロワン社	23名
	豊丘社	5名
	新郷社	10名
	ナイフンボ社	10名

17) 第513大隊に集められた高砂族の役種を整理すると、その召集にも一定の年齢基準があったと考えられる。1924年（大正13年）以前に生まれた人々は「現歩二（現役歩兵二等兵）」として、集められ、1925年以降（大正14年）に生まれた人々は「二國歩二（第二国民兵役歩兵二等兵）」として集められた。その召集日は、日本人87名を除いて「1945年4月1日」であったため、20歳を基準としてその役種が決められたと考えられる。

18) 1936年『高砂族調査書』（台湾総督府警務局理蕃課）



台中兵事部	社名	人数
能高郡 タイヤル族, ブヌン族 240名	タウツア社	10名
	富士社	4名
	千卓万社	22名
	クラス社	6名
	ペルモアル社	6名
	バイバラ社	30名
	櫻社	13名
	トロック社	9名
	眉溪社	4名
	イナゴ社	12名
	バンダイ社	30名
	マシトバオン社	10名
	デビルン社	2名
	カムジャウ社	14名
	バイケ社	1名
	武界社	15名
	マカナージヘン社	1名
	川中島社	3名
	過坑社	35名
	マカナジ社	5名
テビルア社	1名	
テビル社	5名	
ベルスアン社	1名	
バイケイ社	1名	
東勢郡 タイヤル族 53名	南勢社	11名
	雪山坑社	5名
	シカヤウ社	10名
	佳陽社	3名
	ロープーゴ社	7名
	タラス社	2名
	サラマホ社	3名
	埋伏坪社	8名
	ハロンダイ社	1名
	程冷社	3名

日本統治末期、台湾先住民の島内軍事動員（小野 純子）

台中兵事部	社名	人数
日本または不明 14名	東京	1名
	兵庫	1名
	広島	1名
	名古屋	2名
	大阪	1名
	香川	1名
	石川	1名
	佐賀	1名
	熊本	1名
	福島	1名
	不明	3名

（『高砂族調査書』（台湾総督府警務局理蕃課），  
『特設警備部隊第514大隊 台湾第13888部隊 留守名簿』より筆者作成<sup>19)</sup>）

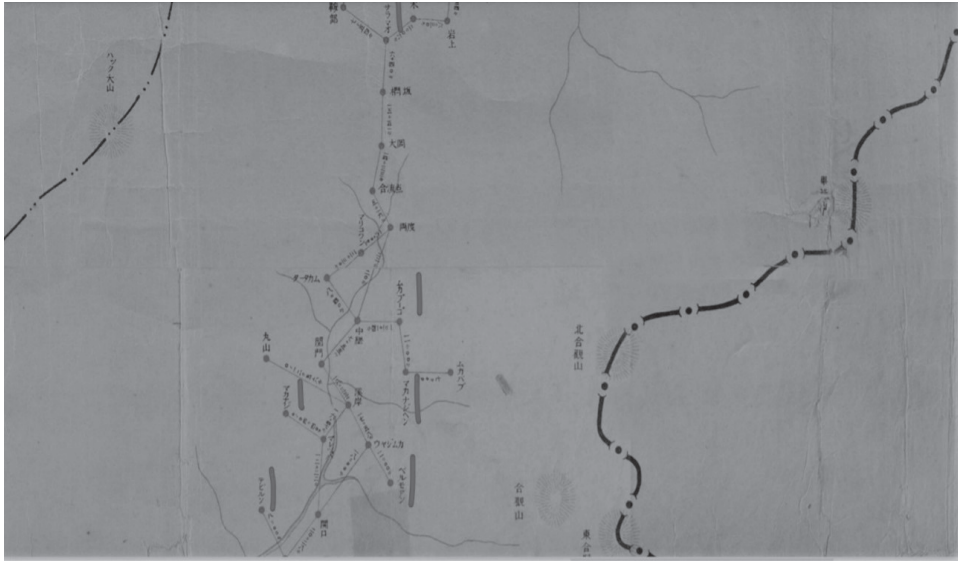
【表3 台南州】

台南兵事部	社名	人数
嘉義郡 ツウオ族 48名	トフヤ社	8名
	チブウ社	3名
	ララチ社	5名
	タツパン社	6名
	ニヤウチナ社	8名
	サビキ社	3名
	タブトアス社	3名
	チヨリテヨリタ社	3名
	ヨリゲ社	2名
	ララウヤ社	5名
	メヨイナ社	1名
	サビキ社	1名

（『高砂族調査書』（台湾総督府警務局理蕃課），  
『特設警備部隊第514大隊 台湾第13888部隊 留守名簿』より筆者作成）

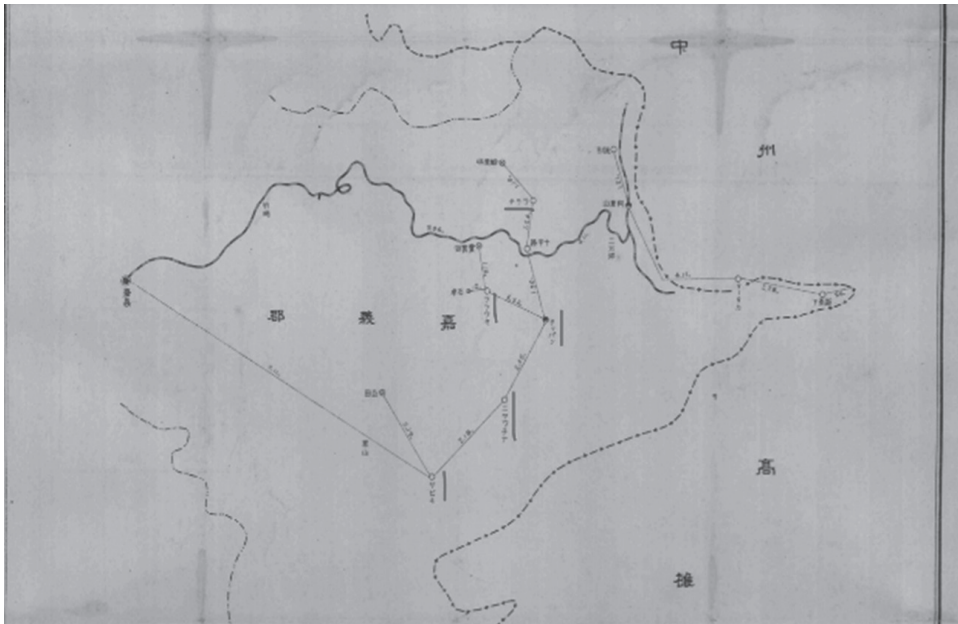
19) 【表2】【表3】は筆者が「留守名簿」を整理して作成したものである。そのため、各蕃社の名前などは、実際と異なる可能性がある。

【图8 台中州】



(出典：臺中州管内里程圖，1921年)

【图9 台南州】



(出典：臺南州蕃地里程表，1936年)

【図8】、【図9】は台中州と台南州の地図である。【表3】記載の蕃社で読み取れた箇所<sup>20)</sup>に線をひいた。

1937年の『高砂族調査書』（台湾総督府警務局理蕃課）によれば、各郡の高砂族男性の人口は、台中州新高郡3,339人、台中州能高郡3,521人、台中州東勢郡716人、台南州嘉義郡896人であった。ここには、新生児から年配者まで含まれる。データは1937年のものであるが、大戦末期でも大きな差はないだろ

う。具体的な1945年のデータがないため、あくまでも推測程度になるが、この人数から、新生児、年配者、そして高砂義勇隊へ参加した人々を除くと、当時台湾に残っていた者で14歳以上の男性は多くはない。

次に第514大隊の日本人に関しては、名簿の作成段階でまとめて前頁に綴られていることや、その前所属や本籍、役種などから日本人であることを判断した。日本人の本籍に関しては、以下、【表4】に整理した。

【表4 第514大隊日本人、出身別<sup>21)</sup>】

出身	人数	出身	人数
香川	1名	神奈川	1名
大分	1名	北海道	1名
山口	1名	広島	3名
愛知	6名	佐賀	1名
秋田	1名	富山	1名
青森	1名	福島	1名
山梨	1名	福島	1名
福岡	2名	千葉	1名
東京	4名	岩手	1名
鹿児島	5名		
高知	1名		
徳島	1名	台東	1名
茨城	2名	高雄	1名
兵庫	3名	台北	1名
熊本	4名	花蓮港	1名
石川	1名	新竹	1名

（『留守名簿』より筆者作成）

20) 臺中州管内里程圖、臺南州蕃地里程表は全体の地図であるが、全体図では蕃社の名前が小さく読みにくいので、拡大したものを使用した。

21) 本籍が日本内地となっていた者である。ただし、一部、本籍と在留地が、熊本県（台中州）、山梨県（台中州）などと記載されている者もいる。

【表5 第514大隊日本人、前所属、転属表】

前所属	人数	転属	人数
歩兵第302連隊	9名	第71師団	5名
第71師団	11名	召集解除	28名
山砲兵第50連隊	5名	台中兵事部	5名
搜索第50連隊	1名	歩兵第88連隊	5名
歩兵第88連隊	8名	歩兵第87連隊	3名
歩兵第301連隊	6名	歩兵第302連隊	1名
工兵第50連隊	1名	戦病死	1名
搜索第48連隊	1名	除隊	1名
第156飛行大隊	2名	歩兵第140連隊	3名
台歩兵第一連隊	1名		
歩兵第87連隊	1名		
第157飛行大隊	2名		
機関銃第7大隊	1名		
第114飛行大隊	1名		
台北	1名		

(『留守名簿』より筆者作成)

日本人に関しては、「現歩見士」(現役歩兵見習士官)<sup>22)</sup>が多いが、第514大隊の中では比較的、高位の存在であった。前所属(【表5】)から、台湾島内特に西側の部隊から集められた人員が多い。最も多いのは、台中から嘉義を管轄していた第71師団からの転属者である。そして、終戦後、日本人52名は27名の召集解除者を除くとそのほとんどが1945年9月3日付で第71師団、第71師団の隷下部隊へと転属している。

以上より、第514大隊が新竹州のブヌン族、ツォ族、タイヤル族及びそして台湾島内各地より転属した日本人らで編成されていたことが判明した。彼らの任務などに関しては、記載がないため実態は不明であるが、これまでの研究からある程度の推察が可能である。彼らは、アメリカ軍の台湾上陸が予想された中、召集と編成が進められた。その後、アメ

リカ軍は台湾を通り越し、硫黄島そして沖縄へと上陸したものの、台湾への上陸の可能性は捨てきれず、台湾島内の防衛を担うために訓練などが進められた。

### 3. 川中島社の事例

本論は、『留守名簿』の整理、分析が中心ではあるが、「川中島社」に注目して、今後の展望も含め、少し分析と補足をする。

川中島社は、霧社事件の抗日蜂起に参加した6つの集落の生存者が集められた集落である。日本の敗戦後に清流部落と改称された。簡鴻模、依婉・貝林、郭明正によって『清流部落生命史』(永望文化事業、2002年1月)がまとめられた。本論では、筆者が整理した『留守名簿』の内容と『清流部落生命史』で整理された内容を照らし合わせ考察を行う。『清流部落生命史』は、限られた資料と清流の長老らの口述記録を集め整理したものであ

22) 「現歩見士」の者は、1945年8月20日付ですべて「現歩少尉」となっている。

り、一定の参考価値がある<sup>23)</sup>。

第514大隊には、3名の川中島社の高砂族が召集されていた。『清流部落生命史』で整

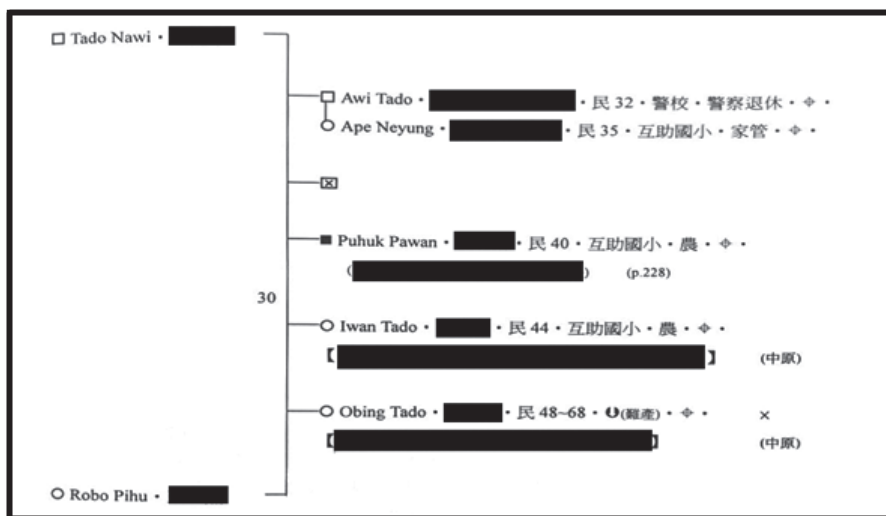
理された口述と家系図には、『留守名簿』に記載された3名に関する（ここでは、匿名A、B、Cとする）の記載があった。

【表6 A, B, Cに関して】

A (1920年生まれ)	B (1927年)	C (1919年)
・本籍地、台中州能高郡川中島社31 ・留守担当者、妻 ・1945年5月15日編入	・本籍地、台中州能高郡川中島社33 ・留守担当者、母 ・1945年5月15日編入	・本籍地、台中州能高郡川中島社51 ・留守担当者、妻 ・1945年5月15日編入

（『留守名簿』より筆者作成）

【図10 A家系図<sup>24)</sup>】

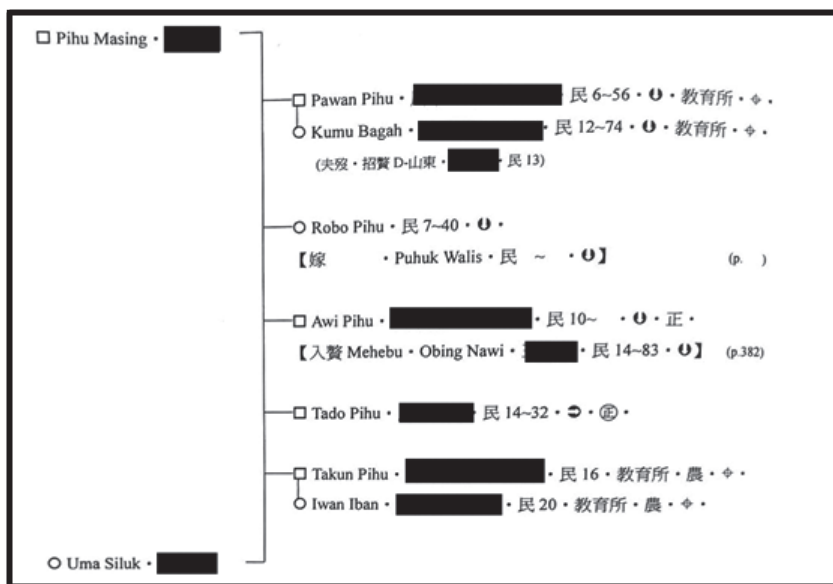


（『清流部落生命史』 p.225）

23) 参考・引用：簡鴻模、依婉・貝林、郭明正合著『清流部落生命史』（永望文化事業、2002年1月）7頁。[http://jats.gr.jp/journal/pdf/gakkaiho012\\_08.pdf](http://jats.gr.jp/journal/pdf/gakkaiho012_08.pdf) 2021年5月8日閲覧。〔学会企画シンポジウム参考資料1〕Kari Alang Nu Gluban（清流部落簡史）ダッキス・パワン（Dakis Pawan 郭明正），下村作次郎訳。

24) 家系図に関しては、漢字名のみ黒塗りとした。

【図11 B家系図】



(『清流部落生命史』 p.238)

以下，A，B，Cに関して整理する。

**A**

Aは、『留守名簿』に記載されている日本名と本籍地，生まれ年が家系図と一致した。Aは民国9年，1920年に生まれ，1990年に死去している。【図10】は，AがRoboPihuと結婚後の家系図である。『清流部落生命史』にAの長男（【図10】参照）AwiTado口述が記載されている。以下，参照されたい。

我的爸爸媽媽是在清流部落結婚的，我是在清流部落出生的，我的爸爸被日本人徵召去太平洋打仗時生了我。

長男は民国32年，1943年に生まれている。長男AwiTadoが生まれた当時（1943年），戦争へ行っているということは，Aは高砂義勇隊員であった可能性が高い。その後1945年5月に高砂特設警備部隊に召集されたことを考

えると第1回または第2回の高砂義勇隊に参加し，帰還，その後再召集されたと推察される。また，Aは，1920年生まれであることから霧社事件当時，10歳前後であり，霧社事件を経験し，川中島へと移住，高砂義勇隊に参加，そして高砂特設警備部隊へと召集された一連の流れに関与した人物である可能性が高い。

**B**

Bは、『留守名簿』に記載されている日本名と本籍地，生まれ年が家系図と一致した。

『清流部落生命史』には，B本人の口述が記録されている。それによれば，三男のTado Pihuは高砂義勇隊に参加し南洋で死去している。また，次男のAwi Pihuは別の口述によれば南洋から帰還後死去している。B本人の口述は妻との結婚に関するもののみであり，自身が召集されたことについては証言していない。

**C**

Cは『留守名簿』に記載された本籍地と『清流部落生命』を照らし合わせ、家系図から名前と生まれ年が一致した。Cは民国8年、1919年に生まれ、1995年に死去している。

家系図から、家族の男性のほとんどが霧社事件で死亡しており、Cを含めた下の兄弟と女性のみが残ったと推察される。

以上、A、B、Cに関して整理した。AとBは、『清流部落生命史』から従兄弟関係であったことも確認した。1936年に刊行された『高砂族調査書』によれば、川中島社の男性は117名である。そして、1945年川中島戸籍資料一覧表によると川中島社は80戸であり、うち日本人が9戸<sup>25)</sup>である。さらにその中から高砂義勇隊へと参加した男性がいたことを考えると高砂特設警備部隊に召集可能な男性は多くなかったと推察される。

**おわりに**

本研究は、筆者がこれまでに進めてきた特設警備部隊、『留守名簿』の研究の中で新たに発掘した「高砂特設警備部隊」の『留守名簿』の初歩的な分析から、その存在を明らかにするものである。既往研究では、台湾原住民の太平洋戦争に関して高砂義勇隊を中心に進められていたため、大戦下における動員の全貌を捉えているとは言えない。

これまでの研究の中で「高砂特設警備隊」の存在を確認し、第513大隊に関してはすでに分析を終えた。本論では、第513大隊に次ぐ第二弾として第514大隊の整理と分析を行った。

第514大隊の名簿分析から、514大隊は、『第10方面軍関係戦史資料』で示された「高砂特

設警備部隊」第3大隊または第4大隊の可能性が限りなく高いと考えられるが、第513大隊と同様に高砂特設警備部隊第3または第4大隊から第514大隊へと改編したことを示す資料はこれまでに発見できていない。しかし、高砂特設警備部隊編成下令（1945年3月22日）と第514大隊の編成日（1945年4月20日）から判断しても、この2部隊は同一のものである可能性が高い。

第514大隊は、台中、台南（嘉義）の部落から集めた高砂族で編成された部隊で、その人員数は600名であった。第513大隊は新竹州の高砂族でのみ編成された部隊であったが、第514大隊は台中州と台南州に跨って召集された。これは、師団管轄によるものである。第514大隊が編成された地域は第71師団の管轄であり、第71師団は台中から嘉義にかけて統括していた。

本論では、一部の蕃社（川中島社）の事例から『留守名簿』と他の資料を照らし合わせ分析を行った。川中島社は霧社事件の生存者らが集められた部落であり、その貴重な家系図や口述記録が『清流部落生命史』として残されている。『留守名簿』に記載された本籍地や日本名、生年月日などから調査が可能であった。しかし、これらの口述では、霧社事件や高砂義勇隊に関する記述はあっても高砂特設警備部隊に関する記述は見られなかった。Bなど、本人による口述もあったが、自身の軍隊経験に関する話は記載されていない。日本軍であれば、戦友会、学校であれば同窓会などのネットワークがあるが、高砂特設警備部隊のような部隊では全体像が分かりづらく、本論で3名の分析ができたことはその中でも成果の一助と言える。

本論で議論した高砂特設警備部隊は、現役歩兵二等兵である。はじめにでも指摘したが、原則的に軍属・軍夫の身分であり、兵士では

25) 『清流部落生命史』 pp.581-582。



ない高砂義勇隊とは異なる存在だ。特設警備部隊は、『留守名簿』から判明しているだけでも5部隊は編成されており、1部隊の人数は部隊ごとに異なるが、第513大隊は600名超、第514大隊が600名であり、同様の部隊が6個編成されていた場合、そこには3000人ほどの高砂族が召集されていた可能性がある。その人数は、高砂義勇隊にも匹敵するものである。しかし、一方で先住民の軍事動員としては海を渡った高砂義勇隊と比べると、大戦末期に島内で陣地構築にあたったのは地味な作業であって、彼らの「記憶」には残りづらく、手掛かりは少ない。

筆者は、軍事史のアプローチの中で、高砂族が集中的に集められた名簿を発掘し、本研究を進めるに至った。本論は、既往の先住民研究との結び付け、具体的な蕃社ごとの整理と戸籍史料などとの結び付けまでは研究が及んでいないため、それらは今後の課題としたい。

**【付記】** 本論は、2020-2023年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究・課題番号20K13202・課題名「日本統治最末期、台湾先住民の島内軍事動員―『留守名簿』を手掛かりとして―」（研究代表者 小野純子）による成果の一部である。